スポーツ・コンプライアンス教育の充実に向けて 5

スポーツ・コンプライアンス教育の充実に向けた情報発信企画の第５弾は、伊藤 彰さんにご登場いただいた。プロ野球ヤクルトスワローズ ドラフト１位入団から一転し、４年目で戦力外通告。その後アマチュア選手の指導者を目指した 1460 日。目標に向かって取り組む姿やご自身の野球人生のなかから培ったコーチング哲学を語っていただいた。さらにコロナ禍で硬式野球部の活動が思うようにできないなかで、選手の自主性をうながす取り組みなども紹介していただいた。

Ⅰ．選手の可能性を信じる。学生の可能性を信じる

伊藤 彰

山梨学院大学カレッジスポーツセンター専任講師
山梨学院大学硬式野球部コーチ

プロ野球選手から一転。アマチュア選手の指導を目指した日々

山梨学院大学に勤務し、カレッジスポーツセンター講師、硬式野球部コーチとして活動しております。現在 43 歳です。

小学校、中学校時代は「調布リトル・シニア」に所属していました。その後、山梨学院大学附属高校に進学し、２、３年時に夏の甲子園大会に投手として出場しました。卒業後の 1996 年にヤクルトスワローズからドラフト一位指名を受けました。登録名は「AKIRA」でした。

しかし、１年目のオフに、アメリカで肩の手術を行いました。その後も一軍での登板の機会はなく、入団４年目の 2000 年に戦力外通告を受けました。４年目のシーズン終了前にも足関節靭帯の手術をしたのですが、まだ自分も 22 歳と若く、野球への思いを断ち切ることはできず、今後どうしようかと悩みながら就職活動を行ったりもしました。いろいろと悩んだすえ、私は教員免許取得を目指して大学進学の道を選びました。

現在は戦力外通告を受けたプロ野球選手（プロ野球関係者）が、３日間の研修を経て「学生野球資格」の回復をし、翌年春にはアマチュア野球の指導に携わることができます（2021 年現在。2013 年から、NPB プロ研修会１日間→学生野球研修会２日間→学生野球適性審査申請→学生野球指導登録届という流れで、高校野球、大学野球で指導をすることができるようになっています）。しかし、私が戦力外通告を受けた 2000 年当時はプロアマ規定が現在と異なり、高校や大学で指導に携われるのが、「教員になって２年経って」初めて申請ができることになっていました。私は高校卒業と同時にプロの門を叩きましたから「大学に

入団時の監督は、故 野村克也監督。写真は入団発表時の伊藤さん
（写真提供：伊藤氏より）

入学し、教員免許を取得する」と目標を立てました。大学の４年間と教員になれたとしての２年間を目標にです。日数に換算すると365日×６年(2190日)になります。

そして、もう一度山梨の地で学びたいと思い、山梨学院大学に入学をしました。それまでは野球一色で過ごしてきましたから、大学生として、野球だけでない、さまざまな価値観に触れることができました。新たな学びや気づきを感じる日々は新鮮でした。間違いなくこの大学生としての４年間が人生の幅を広げてくれたと思います。そして、教育実習などを経て、卒業時に教員免許を取得しました。

写真左から２番目が高橋一三監督、右隣が伊藤さん（写真提供：伊藤氏より）

山梨学院大学硬式野球部のコーチに就任

その卒業時の 2005 年に「学生野球資格」制度の改編がありました。「大学野球は退団後２年経過していれば資格申請ができる」という形になり、私は退団後４年経っているタイミングでしたので、2005 年に山梨学院大学硬式野球部のコーチのお話をいただいたのです。ですので、厳密に言いますと、2190 日先を目指して、1460 日後に大学野球の指導者という責任のある立場を拝命したということになります。

コーチとして日々研鑽を積むなか、2009 年に本学野球部に高橋一三監督(巨人軍Ｖ９時代の左腕エース。通算 167 勝、沢村賞２度）が就任されました。

2009 年から 2013 年にかけて、紅白戦、オープン戦、リーグ戦を通じて 400 試合くらいずっと高橋監督の隣で薫陶を受け、育成や理論など多くのことを学ばせていただきました。

読売巨人軍Ｖ９時代の競争原理、高橋監督が巨人から日本ハムファイターズに移籍されたときに感じたセ・リーグとパ・リーグの違い、投手コーチ・二軍監督を務めたときの話、ジャイアンツ Jr の監督を務められたときの育成の観点の話など、たくさんのお話を聴かせていただきました。今思い返しましても、どれも珠玉と言いますか、宝物の時間です。若輩な私の話にも耳を傾けてくださり、野球を一から勉強させていただいた、そんな感覚でした。

リーダーとしての振る舞い、人々を率いていく者のあるべき姿を学びながら、皆を戦力にし、自信につなげ、どこへでも遠くへ行ってみろ、と、高橋監督から、そんな言葉をかけられているような、背中を押されているような、私も選手もチームもそんな感覚でした。「優れたリーダーとはその才能によって人々を率いていくだけの人間ではない。率いられていく人々に自分たちがいなくては、と思わせることに成功した人々でもある」

これは塩野七生さんの『ローマ人の物語 RES GESTAE POPULI ROMANI』のなかにある一節ですが、本当にこういったことをとことん感じさせていただいた時間で、高橋監督との時間は今でも私の指導の根底に深く刻まれています。

2014 年には悲願であった「全日本大学選手権」にも出場することができました。皆で勝ち取ったリーグ優

勝。選手の、学生の弾けるような笑顔。そして 2014 年から顧問になられていた高橋監督に、全日本選手権の舞台へ皆でお連れできたことは、本当にうれしかったです。

教育者としての活動

山梨学院大学ではカレッジスポーツセンター講師として「スポーツ指導論」や「スポーツと健康」そして新入生クラスの「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の授業を担当しています。学生の成長を間近に感じられる日々はうれしく楽しいです。

「日本教育学会」「日本読書学会」にも所属しており、『教育学研究』の論文や『読書教育の未来』（日本読書学会）を拝読し、野球やスポーツだけでなく、「教育の見地・知見」といったことや「読書について深く考えていく」ことに少しでも触れたいなと思っています。そのほか、私の活動として、小学校に「絵本の読み聞かせ」や、幼稚園児へ「TEE ボールの触れ合い」なども行っています。

カレッジスポーツセンター

山梨学院大学には「カレッジスポーツセンター」というトップアスリートを育成していく組織があります。2004 年には JOC から初代の「トップアスリートサポート賞」を受賞しています。また文部科学省から「スポーツ功労団体表彰」を 2010 年、2013 年、2017 年、2019 年と四度受賞しています。強化育成クラブの監督・コーチは、オリンピックの日本選手団の総監督や国際大会での経験豊富な指導者が名を連ねており、アスリートの指導・サポートを行っています。

山梨学院大学のスポーツというと真っ先に思い浮かぶのは箱根駅伝かなと思いますが、昨今では、例えば 2019 年のラグビーワールドカップに出場したラファエレ・ティモシー選手（コベルコ神戸スティーラーズ）、2020 東京オリンピック、レスリング・フリースタイル 65kg 級金メダルの乙黒拓斗選手（自衛隊体育学校）、柔道・女子 78kg 級金メダルの濵田尚里選手（自衛隊体育学校）も山梨学院大学の出身です。これまでにも多くのオリンピック選手を輩出しています。月に１回「カレッジスポーツセンター会議」があり、監督・コーチ・指導者が集まり、指導法の共有など情報交換を行っています。他競技の指導者が心がけていることや、アプローチしていること、そういったものを共有しています。横のつながりと言いますか、連携というものはカレッジスポーツセンターの大きな文化ではないかなと思っています。

選手の可能性を信じる。学生の可能性を信じる（写真提供：伊藤氏より）

私の指導哲学

私のコーチング・フィロソフィーは「可能性を信じる」ことです。選手の可能性を信じる。学生の可能性を信じる。ここが大きな柱です。

また「Reach Potential」（リーチ ポテンシャル）という言葉も大事にしています。これはアナハイム・エンゼルスの選手育成哲学の言葉だということをお聞きし、「行けるところまで、とことん追い求める」ではないですが、「可能性を信じる」と同義だなと感じました。学生や選手に対して何ができるんだろう、何を

伝えられるのだろうということをこの先も考え尽くしていきたいと思っています。

コロナ禍だからこそ学べること

2020 年の春先から猛威を振るう新型コロナウイルス。変異株の発生など、未だに不安な日々は拭えません。今現在は（2022 年 4 月）は「コロナと共に」というさまざまな工夫がなされ、生活、教育、スポーツ活動も、制限はありますが行われています。猛威を振るい始めた当初、誰もが予想できない事態となり、今まで当たり前に行われていた多くの活動が停止になりました。

私たち山梨学院大学野球部も感染対策を講じながら「少人数でグループに分かれ、密にならないように」といったなかで、進めていたタイミングがありました。そんななかで指導について大きく気づかされることがありました。私自身が心がけていたことも併せて紹介させてもらえればと思います。

まず大事にしていたのは「笑顔を増やす」といったことでした。それまで各カテゴリーに分かれて練習をしていましたが、一度そういった枠を取り払い「学年毎のグループを、少人数で」練習を行っていく、という形にシフトしました。少人数で行いますし、チーム練習や連携などの練習ではなく、自ずと、個別練習と言いますか、スキルアップの練習になっていきます。そのときに、今まで班が分かれて一緒に練習をすることが少なかった同級生とペアになって、ああでもない、こうでもない、ああだよね、こうだよね、と言いながらキャッチボールやＴＥＥバッティングを行っている。その表情は、皆とても良い顔をしています。

一度活動ができないタイミングがあったなかで、でも改めて気心知れた仲間と野球ができる、そんな空気感に包まれているからでしょう。私自身も原点を顧みた、そんな感覚にさせてもらいました。その空気感のなかで、創意工夫やディスカッションしている姿を見ていて、“あっ、これって「ピア・ラーニング（仲間との学び合い）」だ”と思ったのです。今まで野球の練習において、そう思うことがありませんでした（全体練習が終わって、仲間同志で個別練習をしている姿は何度も見ていますが、そういった発想で捉えることがありませんでした）。なんて狭窄的だったんだろう、と。彼らのこうなりたい、や、こういうことをトライしたい、を引き出せていたのだろうか、と。目の前の彼らの姿を見ながら考えさせられた瞬間でした。気心知れた仲間と「こういう練習をしたい、しよう」と「自己決定」をし、そんな時間を過ごしていると「気づきも増え」そして「笑顔が増える」。そんな様相だったでしょうか。ですので、冒頭お伝えした「笑顔を増やす」というのは、彼らの姿から気づかせてもらって「大事にして」いったというところが大きいです。

また、こんな試みもしていました。メカニクス、マインド、他競技から学ぶ、といったことをコンセプトに、１塁ベンチ内に新聞の切り抜きを貼るエリア。そして「YGU baseball ブックス」のエリアをつくりました。

まずは新聞の切り抜きの部分ですが、毎日、スポーツ紙と一般紙合わせて 10 紙を超える新聞のなかから気になる topic をピックアップし、毎日数枚を貼り替えていきました。そのなかには、このコロナ禍でどの

一塁ベンチ内の様子　新聞の切り抜きや書籍が置かれている（写真提供：伊藤氏より）

手に取った本がきっかけで、野球だけでなく目の前の世界が広がってほしい（写真提供：伊藤氏より）

ように向き合いながら自身を高めていくか、といった他競技の選手や、同じく野球選手の工夫、そして、投球メカニクスや打撃メカニクスの連続写真。これらの記事は見てもいいし、見なくてもいい、というスタンスで貼っていました。参考にしよう、とか、オレはそうじゃないな、と思ってもらえればいいと思っています。グラウンドで選手が動いている姿を見て、あれ、今までのアプローチと違うぞ、とか、良くなっているぞ、という気づきがあったときに、すぐにそれを伝えられるようにと思いながら設置しました。“この選手にはこの記事のこの部分を見てもらえたら”とか、そんなことを思い浮かべながら壁に貼っていました。選手に見てもらってもいいし、見なくてもいいのですが、こちらは「今日は何があるんだろう（何が貼ってあるんだろう）」と思ってグラウンドに来てくれたらいいな、と思っていました。逆に、そう思ってもらえるかが勝負だぞ、と。そこは自分に課していたものでした。

さらに「YGU baseball ブックス」ですが、これは簡易的な書籍コーナーです。ふとしたときに手に取ってみる、とか、ページをめくってみる、という書籍に触れられるエリアが身近にあったらいいなと思いながら設置したものでした。練習の一コマのなかにページをめくるといったことを溶け込ませられたら、といった感覚でしょうか。

「自己決定」していく時間だからこそ、「YOU make the CHOICE」な時間だからこそ、そうした機会を自らが時間の中で選び取り、たった１ページの中のその文言が何かに駆り立てられたり、好奇心につながったり、大きく背中を押されたり。そんな出会いをしてくれたらなという思いからです。それが自らの、よし、やるぞ！につなげていってくれたら。そして、そんな経験が、本屋にちょっと寄ってみよう、とか、図書館に行ってみよう、という気持ちに繋がっていってくれたらいいですね（実際にはコロナ禍自粛中で足は運べなかったと思いますが……）。

ジャンルは、野球関連の本も勿論ですが、それ以外にも『夢を叶える教科書』や『大人になるのび太たちへ』など一般書やビジネス書なども置きました。この小さな本棚から目の前の世界が拡がってくれればいいなと思っています。

チームに送った LINE

2020 年 5 月 12 日に全日本大学選手権の中止が決まりました。チームは、秋の新チームからその大会を目標に歩みを進めてきています。春のリーグ戦も延期が続くなかで、正式に全日本選手権の中止が決まりました。集まってミーティングができないなか、選手に、チームに、送った LINE があります。次のような文章で思いを伝えたことがありました。以下は、送った LINE の一節です。

「これからお伝えすることは、答えではありません。

世の中にはコントロールできることと、できないことがあります。変えられない事実があるのならば何をコントロールできるのかを考えることが大事なのではないでしょうか。

今、私が皆さんにこうやってお話できるのも野球があったからだと思ってます。野球は必ず返ってきます。皆さんの野球も必ず返ってきます。

今大事なのは選手も指導者も、どれだけ野球を学べるかだと思ってます。グラウンドにマウンドに打席に立てないから野球が勉強できないわけではない。お互いが学び合いましょう。準備をしていきましょう。皆

さんの野球が帰ってくるその日に向けて。
共に頑張っていきましょう」
これは、こういった状況であっても
「学びを止めてはいけないし、歩みを止めてはいけない」それは選手たちもそうですし、私たち指導者も同じです。全日本選手権出場という目標がなくなったとしても、「自己成長」と「自己発見」。ここが変わることはないし、いや、こんなときだからこそ、より研ぎ澄ませていこうよ、と。そんな感覚で送った LINE でした。

Ⅱ．スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講座で学んだことを活かして

伊藤さんが SCO 養成講座を受講するきっかけになったのは、大学野球連盟主催の「全日本大学監督会」の研修会での武藤先生の講演がきっかけだった。どのような思いで SCO 養成講座を受講し、何を学んだのかについて、お話をうかがった。

――SCO 養成講座を受講するきっかけを教えてください。

「全日本大学監督会」という大学野球連盟主催の研修会があります。監督会という名前ですが、部長、監督、コーチも参加資格がありますので、私も毎年参加をしています。その年のルール改編やスケジュールの確認、研修や講演なども含まれた内容の充実した、学びのある会です。コロナ自粛前の 2019 年 1 月になりますが、その「全日本大学監督会」で、武藤芳照先生が「スポーツ コンプライアンス」についてご講演をされました。

2019 年まで 10 年連続で「全日本大学監督会」に参加していますが、今まで、星野仙一監督、原辰徳監督、栗山英樹監督、侍 JAPAN の小久保裕紀監督、稲葉篤紀監督、柔道の山下泰裕先生といった著名な方々がご講演をされました。指導者として心掛けること、大事にするべきことといったお話を聴講でき、大変感銘を受けるものでした。その年の手帳の MEMO 欄に心に残ったことをメモしており、今でも見返します。

そのようななかでも武藤芳照先生のご講演は、本当に「授業」であり「講義」でした。これがもう素晴らしい内容で、レジュメを使いながら、約 170 名の大学野球の監督や指導者に名指しで質問を投げかけていく。私もいつ指名されるのだろう、と、ハラハラしながらで、質問されたら、こう答えよう、と、シミュレーションしているくらいでした。武藤先生の資料にびっしりとメモしながら講義を受け、非常に濃密な時間を過ごしました。大学の授業と同じ 90 分の時間でしたが、武藤先生に「伊藤、授業というのはこうやって進めていくんだ」と言われているような、鉄槌で頭を叩かれたような、そんな感覚になりました。

その講演の最後に「SCO 養成講座」の案内がありました。私は武藤先生のこうやって展開される 90 分の神髄をさらにお聞きしたいと思いました。また、その SCO 養成講座のプログラムのなかに増島みどりさんのお名前が記載されていました。私はそれを見て「あ、増島さん！」と思ったんです。なぜかというと、私は、東京中日スポーツ新聞に掲載されていた、増島みどりさんのコラム『セブンデイズ』の兼ねてからの読者で、温かく、そしてハッとされられることも多く、いつも気づきをいただくような気持ちで拝読していました。実は、野球部の選手たちがオフシーズンに帰省するときなどに読んでもらえるように、8～10 ページぐらいの冊子を制作して配布していたことがあります。その冊子に、増島さんの『セブンデイズ』で心に

残った記事を紹介したこともありました。武藤先生の神髄にも触れたいですし、増島さんの講義も拝聴できる。もうこれは絶対行かなければと思いました。それがきっかけでした。

――SCO 養成講座を実際に受講されてみていかがでしたか？

武藤先生の講義はもちろんですし、弁護士の先生の「スポーツと法」のお話も勉強になりました。なにより受講されている皆さんも問題意識を持って参加されているのが印象的でした。ある講座後の質疑応答では、非常に白熱した時間となり、私も手を挙げ続けていたのですが、１度目は当てていただきましたが、２度目に私が質問させていただく時間は回ってきませんでした。それくらい皆さん、知りたい、学びたいに溢れていました。

本養成講座で、自分の無知で至らない部分をとことん突き付けられました。本当に刺激と学びに溢れた、密度の濃い時間でした。私も刺激を受けて、皆さんに負けないように襟を正してさらに学びを深めていかなければいけないと、そう思わされる時間となりました。

――SCO 養成講座の内容には、さまざまな問題がとりあげられていますが、伊藤さんが一番関心をもったテーマは何でしたか？

すべてと言うとありきたりな表現になってしまいますが、もし順番をつけるのであれば一番は「スポーツインテグリティ」の部分です。スポーツはこうあるべきだとか、スポーツは素晴らしいものなんだというものを、非常にわかりやすく噛み砕いて、いろいろなケースをご紹介いただき、学ぶことができました。

スポーツの素晴らしさはもちろん、こうだったらスポーツでなくなってしまうとか、これはスポーツとしてはやるべきことではないんだとか、フェアネスもですよね。そういったことに感銘を受けました。またスポーツに関する法的観点など、弁護士の先生のわかりやすいお話から、今まで私自身がスポーツをある一部分でしか見られていなかったことを再確認されられる時間となりました。

――伊藤さんのご自身のご体験として選手時代に、SCO 養成講座で学んだようなことを教えていただいた経験はありましたか？

プロ野球選手になった１年目に NPB 主催の新人研修がありました。多くの充実した内容で研修を受けさせていただきましたが、これは私が至らなかったこともあり、多くを理解できる素養を持ち合わせていませんでした。今でも当時の資料を持っていますが、メモをしているのは数カ所、数えるくらい。今、改めて受講させていただきたい気持ちですし、今であれば余白がなくなるくらいメモをするのでしょうが、当時はそういった習慣は持ち合わせていませんでした。

省みてという表現になりますが、学ぶ側のマインドと言いますか、そういったものも大きいですよね。目の前の事をどれだけ自分の血肉にしていけるか。経験や心構え、そしてどれだけ自分事に変換できるかの思考と言うのでしょうか。私ももちろんまだまだですが、今現在、授業を担当させてもらっている、そして、指導する側の立場に立たせてもらっている、そういったなかで「アウトプットするためのインプットの重要性」というのでしょうか。講義・講座を受講するといったことや、勉強するといったことでも、目の前に伝えるべき相手がいる状況ならば、全く景色は違うのだと改めて思わされます。Learning by teaching ですよね。

今、目の前に学生がいて、彼らに何を伝えられるのか、どうやったら彼らがもっともっと可能性を広げて、より良く、力強く、歩みを進めていってくれるだろう、そのために何ができるんだろうと。やはりそこが非常に大きいと思います。これはアクティブラーニングといった部分になるかと思いますが、（先のピア・ラーニングも含む）、前回（2021 年 11 月）の SCO 講座で、学研のこどもスポーツ教育プロデューサー・藤井

祥宏氏がラーニングピラミッドのお話をされていたのは記憶にまだ新しいところです。やはり能動的に学んでいくことの大切さや、そういうアプローチの重要性の部分だと思います。

――伊藤さんがこれからも伝えていきたいことは何ですか？

「相対化の視座」ですね。「相対化の視座」というのは、ひとつの物事を多面的に多角的に見ることの重要性というのでしょうか。自分の目の前のこととか、自分の当たり前は当たり前じゃない、ということです。

例えば、野球という経験してきた競技があって、さまざまなご指導を賜りながら、培っていくなかで成長してきたことがたくさんあります。それはとても大事なことで、自分の信念になり得ていることは間違いありません。けれど、自分の視えているものだけがすべてではない。別の観点や視点の基で、もっとより良いものはないかを考えたときに、他競技や他業種、他分野から学べることもたくさんあるのです。

SCO の講座もそうですが、いろいろな競技に携わっている方、競技だけでない法的な観点やビジネスの観点のお話も貴重なものだと思います。そうやって自分自身を相対化していく経験は大事ですね。また読書体験（経験）も同じことが言えると思います。自分だけでは経験できないさまざまな考え方や世界に触れることができます。

先日、基礎演習クラスのメンターを務めてくれている女子学生に本を渡しました。『ガーズルズ・ビー・アンビシャス』『メルケル世界一の宰相』『ニュージーランド アーダーン首相』の３冊です。

『ガールズ・ビー・アンビシャス』は東大名誉教授の上野千鶴子先生、宇宙飛行士の山崎直子さん、DeNA 南場智子オーナー、人権活動家のマララさん、環境活動家のグレタさん、など多くの著名な方のお話が掲載されています。メルケル元首相やアーダーン首相の本もそうですが、「メンターとして、クラスを温かく、優しく。時には力強く。引っ張っていったり、背中を押してほしい」そんな願いを込めてです。たくさんの方の世界に触れながら、たくさんのチャレンジをしていってほしい。そういったなかでより良い自分を築いていってもらえたら、と思いました。

先ほど「可能性を信じる」というお話をさせてもらいましたが、自らの成長を、そして可能性を自分自身が一番楽しみにしてほしい。夢の力は重い扉さえも開けてしまう。これは私が関わらせてもらった学生や卒業生たちから感じさせられたことなのです。是非、自分を信じて頑張っていってほしい。私もそんな瑞々しい感性や想いに負けないように頑張っていきたいです。

（取材・構成：編集工房ソシエタス　田口久美子）

伊藤　彰（いとう・あきら）

山梨学院大学カレッジスポーツセンター専任講師。硬式野球部コーチ。
1978年生まれ、東京都出身。
山梨学院大学附属高等学校卒業後、ヤクルトスワローズ入団。現役時代は投手。高校時代 1995年、1996年と夏の甲子園に連続出場。1995年の鳴門高戦で勝利投手、1996年は準優勝した熊本工に初戦敗退した。1996年のドラフト会議でヤクルトスワローズから１位指名され入団。1997年から2000年のシーズンまでヤクルトスワローズに在籍。プロ野球退団後の 2001年に山梨学院大学に入学し、卒業時には教員免許を取得（公民）。2005年４月から山梨学院大学硬式野球部コーチに就任。担当科目はスポーツ指導論、スポーツと健康、基礎演習Ⅰ・Ⅱ。